

野新村1号窯発掘調査報告書

平成 22 年 2 月

加古川市教育委員会

野新村1号窯発掘調査報告書

平成 22 年 2 月

加古川市教育委員会

例　　言

- 1 本報告書は、加古川市教育委員会が平成 20 年度に実施した野新村 1 号窯の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、民間開発の露天資材置き場造成工事に伴うものである。調査は平成 21 年 1 月に実施した。
- 3 発掘調査は加古川市教育委員会が主体となって実施し、西川英樹が担当した。
- 4 本報告書は、上月昭信と西川英樹が分担して執筆した。各項の執筆者は日次に記載した。
- 5 本書で報告した遺物、図面、写真は加古川総合文化センターにおいて保管している。
- 6 本書の執筆に際しては、兵庫県立考古博物館の森内秀造氏、篠宮正氏、加西市教育委員会の立花聰氏、永井信弘氏から教示を賜った。記して感謝します。

本文目次

第1章 発掘調査の経緯	
第1節 発掘調査にいたる経緯	(西川) 1
第2節 遺跡の地理的・歴史的環境	(西川) 1
第3節 発掘調査・遺物整理・報告書作成の体制	(西川) 3
第2章 遺構と遺物の概要	
第1節 トレンチの概要	(西川) 6
第2節 遺構の概要	(西川) 7
第3節 遺物の概要	(上月) 8
第3章 総括	
第1節 遺構について	(西川) 17
第2節 遺物に関する考察	(上月) 17
挿図目次	
周辺遺跡分布図	4
表目次	
周辺遺跡分布図地名表	5
出土遺物観察表	10
図版目次	
トレンチ設定位置図 1	12
トレンチ設定位置図 2	13
野新村 1 号窯 窯体実測図	14
実測図 1 (野新村 1 号窯出土土器)	15
実測図 2 (溝之口遺跡出土壙 G)	16
実測図 3 (野新村 3 号窯出土須恵器)	16
実測図 4 (白沢 2 号窯出土壙 G)	16

写真図版目次

写真図版 1 調査地近景

写真図版 2 第 1 トレンチ、崖面精査作業

写真図版 3 野新村 1 号窯

写真図版 4 野新村 1 号窯

写真図版 5 野新村 1 号窯、第 3 トレンチ、第 4 トレンチ

写真図版 6 出土土器

写真図版 7 出土土器

写真図版 8 出土土器

写真図版 9 出土土器

第1章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査にいたる経緯

野新村古窯跡群は、加古川市八幡町野村に所在する古代の窯跡群である。加古川の支流である草谷川に沿って、延びる丘陵の谷部斜面に3基築かれている。

この土地に民間事業者が露天資材置き場を造成する計画を立てた。加古川市教育委員会は、窯跡の保存について数度にわたり協議を行った。当初、野新村古窯跡群全体が計画地に入っていたが、その後、設計が変更され、野新村2、3号窯及び隣接する野新村古墳は、現状のまま保存されることとなった。しかし、資材置き場の予定地であるため池に隣接する位置にある野新村1号窯のみは、造成工事によって、深く盛土されてしまうことが避けられない状況となった。

野新村1号窯は、土取りによると思われる崖面に窯体断面が露出しており、すでにかなり破壊されていることが調査前の観察から明らかであった。その残存部を把握するため、加古川市教育委員会では、平成21年1月5日より調査を開始した。その結果、第2トレーニングにおいて、残存する窯体を確認することが出来たため、この部分について、発掘調査を行った。

第2節 遺跡の地理的・歴史的環境

野新村古窯跡群は、加古川の支流である草谷川の南約200mの位置に所在する。草谷川に沿って形成された高さ約10mの段丘の斜面を利用して構築された登窯である。このような土地は、利用が難しいため、雑木林などになっている場合が多い。遺跡周辺も現状では雑木林となっている。

3基の窯は、南北方向に沿って約250mの長さで延びる丘陵谷部の斜面に構築されている。この谷は、南方向から北方向に向かって低く傾斜しており、南側には谷をせき止めてふたつのため池が造られている。

この窯については1972年に真野脩氏が地元の人が採集したこの窯跡群出土とされる須恵器の報告をしている。また、1979年頃に吉井秀夫氏によって現況が観察され、3基の窯が存在し、どれも断面が露出していると報告されている。2004年に上月昭信氏は、現在樹木が生い茂っているが、うち一基(1号窯)は崖面に窯体の一部が残存していると記している。今回の市教委による調査においても、同様に三基のうちの一基である1号窯の窯体が崖面に露出している状況が確認できた。

野新村の地名については、由来は不詳であるが、野村の新田村という意味であると考えられている。『日本歴史地名大系第29卷Ⅱ兵庫県の地名Ⅱ』では「のしんむら」と読んで

いるが、『角川日本地名大辞典』では、「のしむら」と読んでいる。「元禄郷帳」「天保郷帳」には、「野村枝郷」と記されている。江戸時代には姫路藩に属し、村高は 11 石であった。

周辺の遺跡としては、八幡神社周辺の丘陵部に弥生時代の散布地である野村遺跡が存在する。また、草谷川東側の丘陵上には野村古墳群が 3 基想定されている。発掘調査は行われておらず、詳細は不明である。野新村古窯跡群の北側、谷部の開口部付近にも野新村古墳が想定されており、マウンドを有するが、これも詳細は不明である。また、野新村古窯跡群の北西約 600m の段丘縁辺部に、野新村 1 号墳が想定されているが、詳細はやはり不明である。

野村古窯跡群は 4 基からなり、野村集落より南西方向の池に面した丘陵裾部にある。丘陵斜面に築かれた登窯である。1 号窯は池の堤防に窯跡の断面が露出している。また、その南側における灰、炭や遺物の散布状況から 2~4 号窯の存在が想定されている。採集された遺物には蓋杯、高杯、壺、甕、鉢などがあり、1、2 号窯の採集品は 6 世紀後半~7 世紀初頭の時期と考えられている。

野村構居跡は野新村古窯跡群から北西へ約 1.7 km 離れた丘陵上に築城されている。雜木林の中にあるため発見しにくいが、保存状態は良好である。東西約 130m、南北約 90~100 m の規模で、西に郭を 1 つ配し、東側にも南北に 2 つの郭が造られている。東側の堀もよく残り、全体的に残存状態は良好である。『加古郡誌』の記述によれば、城主は『播州古城記』では宮部吉祥坊とあり、『播州古城軍記』では宮部善祥坊となっている。『播州古城記』によると「天正の頃羽柴秀吉に従いて軍功あり又三木合戦の節にも武功をあらはし英賀戦争にも功多し且つ天正九年七月秀吉の因州鳥取を攻めし時には一方の旗頭として従い功あり」と記されている。

参考文献

- 貞野脩『上西条遺跡』上西条遺跡調査団 1972 年
吉井秀夫「野新村古窯址」『鹿児第 46 号』加古川史学会 1980 年
中村浩「窯跡」『加古川市史第 7 卷』1985 年
田中眞吾「加古川市付近の地形と地質」『加古川市史第 1 卷』1989 年
平凡社『日本歴史地名体系第 29 卷 II 兵庫県の地名 II』1999 年
角川書店『角川日本地名大辞典 28 兵庫県』1988 年
上月昭信『播磨地方における 6 世紀・7 世紀の須恵器生産』2004 年

第3節 発掘調査・遺物整理・報告書作成の体制

発掘調査参加者

調査員

西川英樹

作業員

佐藤敦子・平位光子・大西寿代・萬谷美香

遺物整理員

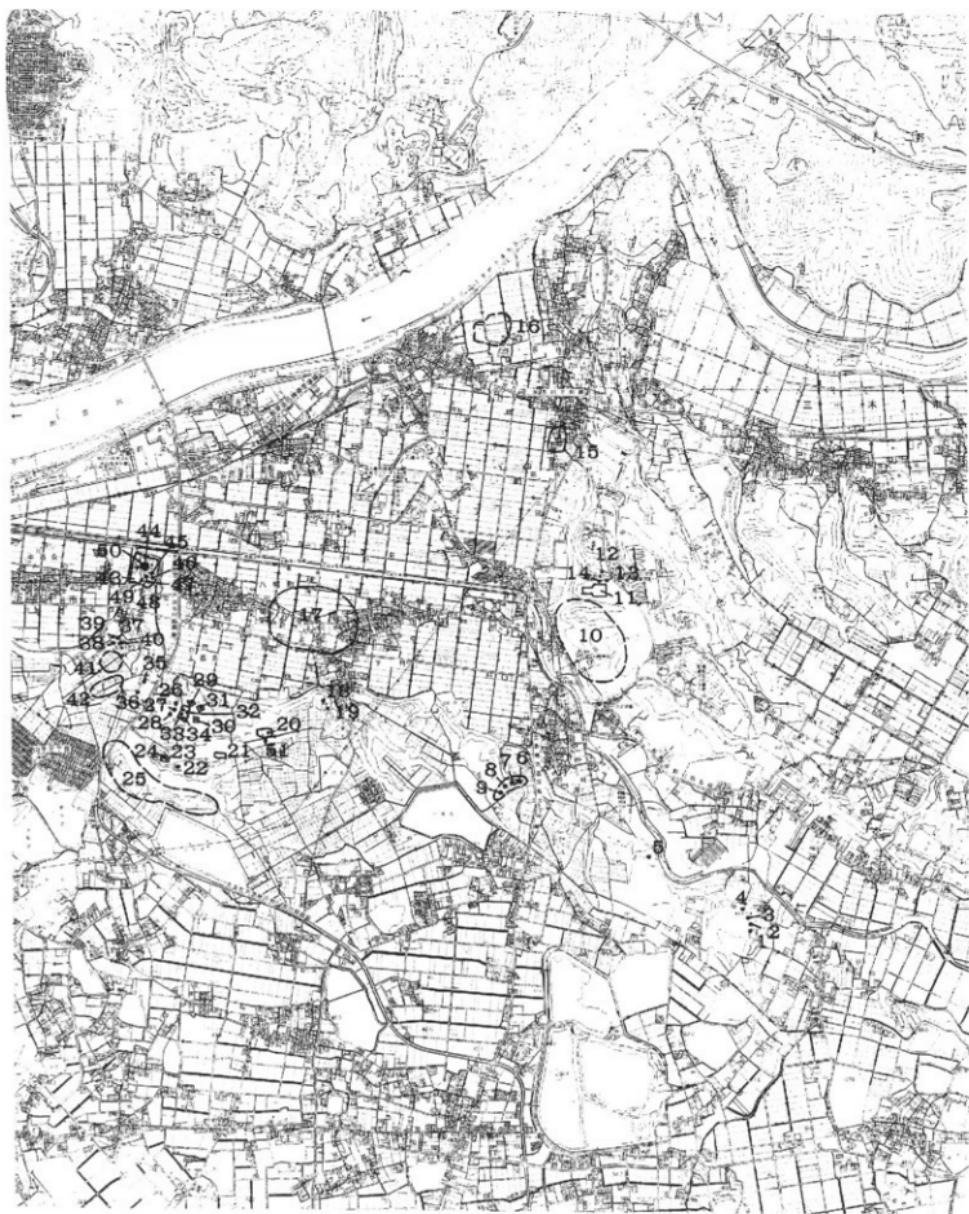
采野尚子・南良子・留岡亜希子・齋田潤子・平位光子・友重啓子・石塚美香

土器実測図・拓本

上月昭信

報告書執筆

上月昭信・西川英樹



周辺遺跡分布図

番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	野新村1号窯	27	西田池2号墳
2	野新村2号窯	28	西田池3号墳
3	野新村3号窯	29	天王山1号窯
4	野新村古墳	30	天王山2号窯
5	野新村1号墳	31	天王山1号墳
6	野村1号窯	32	天王山2号墳
7	野村2号窯	33	天王山3号墳
8	野村3号窯	34	天王山4号墳
9	野村4号窯	35	池ノ尻古墳
10	野村遺跡	36	播磨堂遺跡
11	野村構居跡	37	成福寺1号墳
12	野村1号墳	38	成福寺2号墳
13	野村2号墳	39	成福寺4号墳
14	野村3号墳	40	成福寺3号墳
15	宗佐構居跡	41	古堂廃寺
16	国包構居跡	42	上村池遺跡
17	下村遺跡	43	宮山遺跡
18	大口山遺跡	44	宮山大塚古墳
19	下村古墳	45	宮山1号墳
20	望塚（盆塚）	46	宮山2号墳
21	東沢中遺跡	47	宮山3号墳
22	天王山遺跡	48	宮山4号墳
23	神野大林窯跡	49	宮山5号墳
24	東沢2号墳	50	宮山6号墳
25	猫池遺跡	51	東沢1号墳
26	西田池1号墳		

周辺遺跡分布図地名表

第2章 遺構と遺物の概要

第1節 トレンチの概要

野新村1号窯は草谷川の南に位置し、川の方向に向かって開口する南北方向に延びる丘陵谷部の斜面に立地する。標高は約52mである。調査時における遺跡の現状は雑木林であるが、この丘陵はかつて開拓されていた痕跡がある。谷の南側には、谷底を堤防でせき止めてため池が二つ造られている。1号窯は、ため池に隣接する丘陵斜面に築かれているが、この場所は、標高約51.5m付近で大きく断ち割られたように破壊されており、標高約49～48m付近まで、すこし湾曲した断崖となっている。この断崖を精査すると、頂部に先学によって指摘されていた窯体断面を明瞭に確認できた。窯は丘陵頂部の地山層である黄色～黄橙色砂礫層を掘り込んで構築された半地下式の登窯である。第2トレンチにおいて検出された。トレンチは、窯の広がりを調べるために4箇所設定した。窯体断面の規模を平面的に検出するために第1トレンチおよび第2トレンチが設定された。第3トレンチは断崖の下に設定し、灰原が残っているかを調査した。第4トレンチは、資材置き場建設予定地の範囲内において、別の窯跡の存在を探すため、第3トレンチから北へ約40mの位置に設定したトレンチである。

第1トレンチ

標高約53～54m付近の丘陵上に設定したトレンチである。位置は窯体断面の崖面頂上から西に4mの地点を起点として、東に延びる方向に設定した。東西約6m×南北50cmの規模で、面積は3m²である。トレンチ内の基本層序は、第1層表土層、第2層黄褐色砂質土層、第3層黄色～黄橙色砂礫層となっていた。第1層は落ち葉、腐朽木、腐植層等の堆積層である。第3層は地山の丘陵台地層である。このトレンチでは、窯体よりさらに上部において、遺構を探したが、遺構は検出されなかった。

第2トレンチ

標高約51～52m付近に設定したトレンチである。東西約4m×南北約2.5mの規模で、面積は10m²である。窯体断面が露出する崖面上に設定した。このトレンチは、窯を平面検出するために設定した。基本層序は、第1層表土層、第2層黄褐色砂質土層、第3層黄色～黄橙色砂礫層で、第1トレンチと同じである。表土層、第2層ともに厚さは5cmである。第3層表面から、窯が東西約3m、南北約1mの範囲で検出された。詳細については、次章で記述する。

第3トレンチ

標高約47m付近の崖面下に設定したトレンチである。南北約2.5m、東西約4mの規模で、東側はため池から延びる素掘りの溝に接する位置となる。大きく抉られた崖面の状況から

灰原が残る可能性は非常に低いと考えられたが、このトレンチにより、確認を行った。基本層序は第1層表土層、第2層黄褐色砂質土層、第3層黄色礫混じり砂質土層である。第3層が地山の台地層である。調査の結果、遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。このトレンチに直交する素掘りの溝の断面も観察したが、地山層のみであった。また、隣接するため池の水際にも地山層が広範囲に露出していたため、極力観察をしたが、やはり遺構・遺物ともに確認されなかった。

第4トレンチ

他のトレンチとは異なり、第3トレンチから北へ40mの位置に設定した。東西6.5m、南北7mの規模で、面積は約45m²である。この場所に資材置き場の調整池が造られる予定であったため、トレンチを設定して遺構を探すこととした。西側の丘陵末端部に土取りによると思われる断面が露出していた。これはもっとも高い所で1.3mあり、表上は数cmから10cmの堆積でその下は黄色礫混じり砂質土層となっていた。この露出部をトレンチ西端として、この東側に長さ7mのトレンチを設定した。

第1層表土層、第2層黄色礫混じり砂質土層(地山層)となっていた。このトレンチでは、表土層と地山層の間に中間層が無く、表土直下が地山となっていた。第2層を精査したが、遺構・遺物ともに発見されなかった。

第2節 遺構の概要

野新村1号窯は草谷川の南に位置し、これに向かって開口する南北方向に延びる丘陵谷部の斜面に立地する。標高は約52mである。現状は雜木林であるが、かつて開拓されたことがあるようで、木製の電柱が朽ち果てて残っている。谷の南側には谷底を堤防でせき止めたため池が二つ造られている。これと関係があるのか、1号窯が所在する斜面は、標高51.5m付近から大きく断ち割られており、標高約50m付近まで垂直に近い断崖で、そこから標高約49m付近までこし湾曲した断崖となっている。断崖頂上部には、窯体断面が明瞭に目視され、その規模は幅約1.3m、深さ約33cm程度である。窯体断面の周囲には、幅約10~15cmの赤色酸化層が全体に広がっていた。

窯は丘陵斜面の地山層である黄色～黄橙色砂礫層を掘り込んで構築された半地下式の寄窯である。第2トレンチにおいて検出された。窯は窯体の上部を残すのみである。窯体の下部と灰原はすでに破壊されて、消滅している。残存部の検出長は約3m、最大幅約1.3mで、深さは最大約33cm程度で、先端はすぼまる形となる。窯体の埋土はA-A'断面で、第1層明黄褐色砂質土層、第2層褐色粘質砂層、第3層明黄褐色砂質土層となっていた。窯壁片は各層より出土した。窯壁片にはスサ混じりの粘土が見られる。また、埋土上より架構材の一部も出土した。

窯体は、右(北側)では明青灰色に還元焼固した貼壁が一部残存していた。比較的良好に残っている箇所では長さ約70cm、幅約5cm、高さ約20cmの範囲が残っていた。貼壁の一

部に粘土を指で撫でつけた痕跡も観察された。左（南側）の壁も部分的な残存であるが、高さは約30cm残る箇所があった。右と同じく明青灰色に還元焼成していた。

床面には明瞭な貼床は見られず、地山である砂礫層がむき出していた。床面の傾斜角度は部分的にすこし変化するが、約30度である。床面は灰～灰黄色を呈し、下層には赤色酸化層が全体に10～15cm程度の厚さで広がっていた。また、窯体を断ち割っている断崖の断面観察から窯体周辺に溝を掘った痕跡は見られなかった。灰原をさがすために断崖の下に設定した第3トレーナーからは灰原はまったく検出されなかつた。また、これと直交する素掘りの溝（ため池にともなうもの）の断面観察や隣接するため池内の地山観察からも灰原の存在を伺わせる遺構・遺物ともにまったく発見されなかつた。残存部がわずかなるため、出土遺物は少ない。大半が坏Gの身である。その他には壺、甕の破片等が出土した。出土した遺物はすべて埋土中からのものであるが、底部に孔があいた坏Gが1点、床面直上近くから出土した。これは、底部を上に向けた状態で出土した。（実測図1）

第3節 遺物の概要

野新村1号窯から出土した土器はすべて須恵器であった。土取りによって窯体の一部と灰原のすべてを失っていたため、合計33点と少量であった。いずれも窯体内部の残存部分に堆積した土層から出土した。

出土した須恵器は坏G身11点、甕1点、坏B身の可能性のあるもの1点、壺破片2点、甕破片18点がある。このうち、図化できたものは19点である。（実測図1）

(1) 坏G身(1～11)

坏G身は11点出土している。

1は、底部の一部を欠損しているが、口径10.0cm、器高3.2cm、口縁部内外面は回転ナデ調整、底部外面はヘラ切り後、ナデ調整を行う。内面に焼けた細砂が付着する。

2は、口縁部と底部の一部を欠損しており、口径、器高は不明である。口縁部内外面は回転ナデ調整、底部外面はヘラ切り後、ナデ調整を行う。

3は、ほぼ完存しており、口径10.1cm、器高3.3cm、口縁部内外面は回転ナデ調整、底部外面はヘラ切り後、ナデ調整を行う。底部内面中央に横ナデ調整の痕跡が見られる。内外面に焼けた細砂が付着する。

4は、ほぼ完存しており、口径10.1cm、器高3.1cm、底部外面はヘラ切り後、ナデ調整を行う。底部内面中央に横ナデ調整の痕跡が見られる。口縁部内外面は回転ナデ調整、内外面に焼けた細砂が付着する。

5は、生焼けの製品で約50%が残存している。口径11.0cm、器高3.4cm、底部外面はヘラ切り後、ナデ調整を行い、底部内面中央に横ナデ調整の痕跡が見られる。口縁部内外面は回転ナデ調整を行う。

6は、ほぼ完存しており、口径10.0cm、器高3.0cm、底部外面はヘラ切り後、ナデ調整

を行い、底部内面中央に横ナデ調整の痕跡が見られる。口縁部内外面は回転ナデ調整、内外面に焼けた細砂が付着する。

7は、50%残存している。内外面とも黒ずんでおり、粗雑なつくりであり、口径 10.4cm、器高 3.3cm、底部外面はヘラ切り後、未調整のまます。底部内面中央に横ナデ調整の痕跡が見られる。口縁部内外面は回転ナデ調整、内外面に焼けた細砂が付着する。

8は、口縁部と体部の一部が残存する。口径は 10.0cm 程度と思われ、口縁部内外面とも回転ナデ調整を行う。

9は、底部の一部が残存しており、口径、器高は不明である。底部外面はヘラ切り後、ナデ調整、内外面は回転ナデ調整を行う。

10は、約 50%が残存している。口径は 9.0cm、器高 3.6cm、口径に対して身がやや深い。底部から体部、口縁部にかけて丸味をもち、底部外面全体を回転ヘラ削りし、丁寧に調整する。口縁部内外面は回転ナデ調整、内外面に焼けた砂が付着する。

11は、底部を欠損している。口径は推定 10.0cm、器高は推定 3.0cm、口縁部内外面とも回転ナデ調整、底部外面はヘラ切り後、側端部を回転ヘラ削りする。内外面に焼けた細砂が付着する。

(2) 膳

12は、膳と思われ、口縁部のみ残存しており、逆「ハ」の字形に開く。口径 10.4cm 口縁部内外面とも回転ナデ調整を施す。

(3) 坯 B 身

13は、坯 B 身の可能性があり底部を欠損しているが、復元すると、口径 18.4cm の大型の坯 B 身となる。口縁部外面は回転ナデ調整、壊体部に融着している。

(4) 壺

14は、壺の体部である。口縁部と底部を失っており、全体の形は不明である。体部外面上半部は回転ナデ調整、下半部は縦ナデと横ナデ調整、体部内面は回転ナデ調整を行う。

(5) 壺

壺はいずれも体部の破片であり、18点のうち 5点を図示した。体部外面は平行叩き、内面は円弧叩きであるが、いずれも外面に横、斜め方向の多条のカキ目痕が認められる。

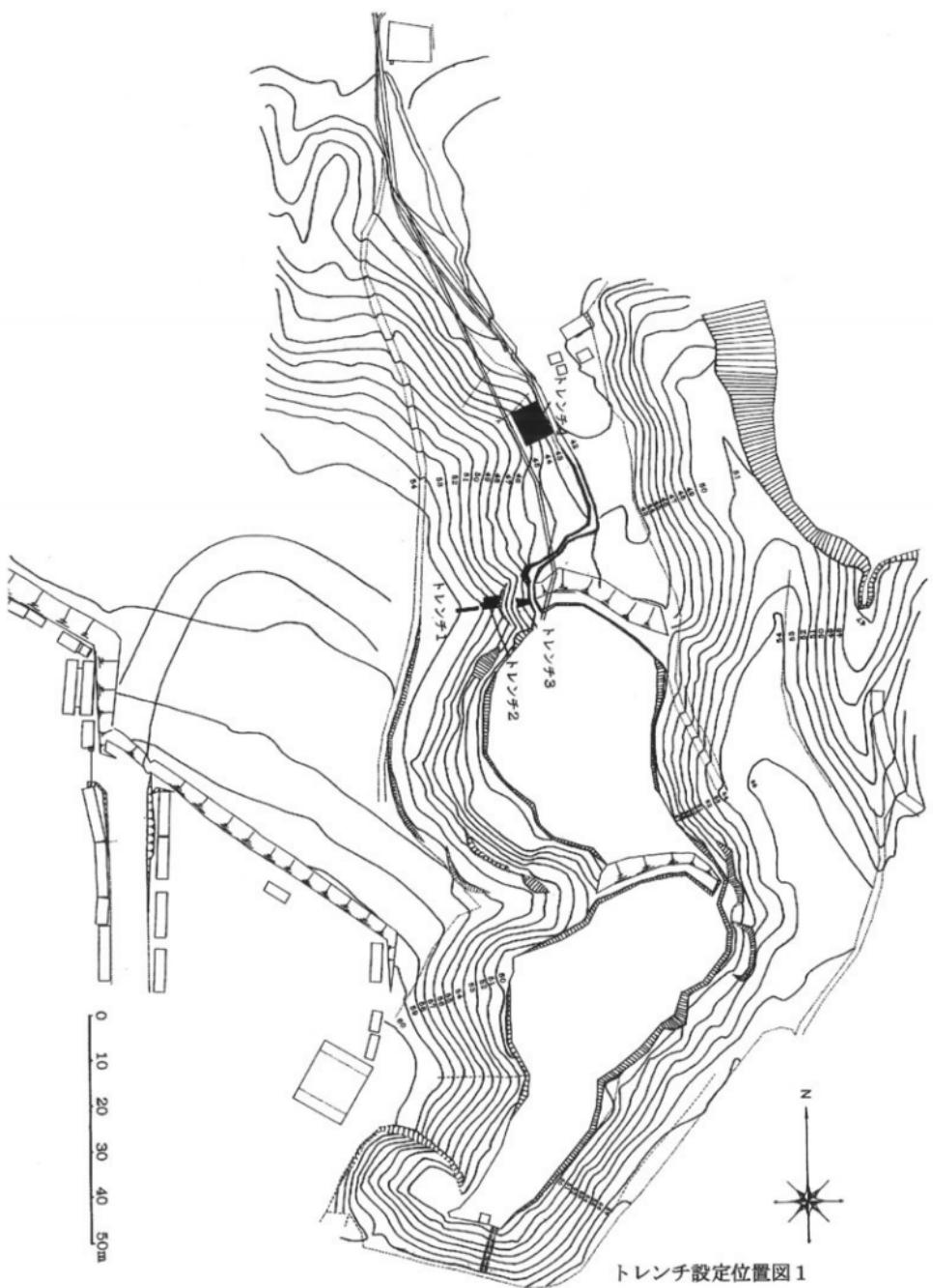
15は、壺の体部の破片である。体部外面は平行叩きの後、2条から 4条のカキ目痕が横、斜め方向に見られる。内面は円弧叩きである。16は、壺の体部の破片である。体部外面は平行叩きの後、多条の軽いカキ目痕が横方向に見られる。内面は深い円弧叩きである。17は、壺の体部の破片である。体部外面は平行叩きの後、多条のカキ目痕が横、斜め方向に見られる。内面は円弧叩きである。18は、壺の体部の破片である。体部外面は平行叩きの後、外面の半分程度に多条のカキ目痕が横方向に見られる。内面は円弧叩きである。19は、壺の体部の破片である。体部外面は平行叩きの後、横、斜め方向に多条のカキ目痕が見られる。内面は深い円弧叩きである。

出土遺物観察表

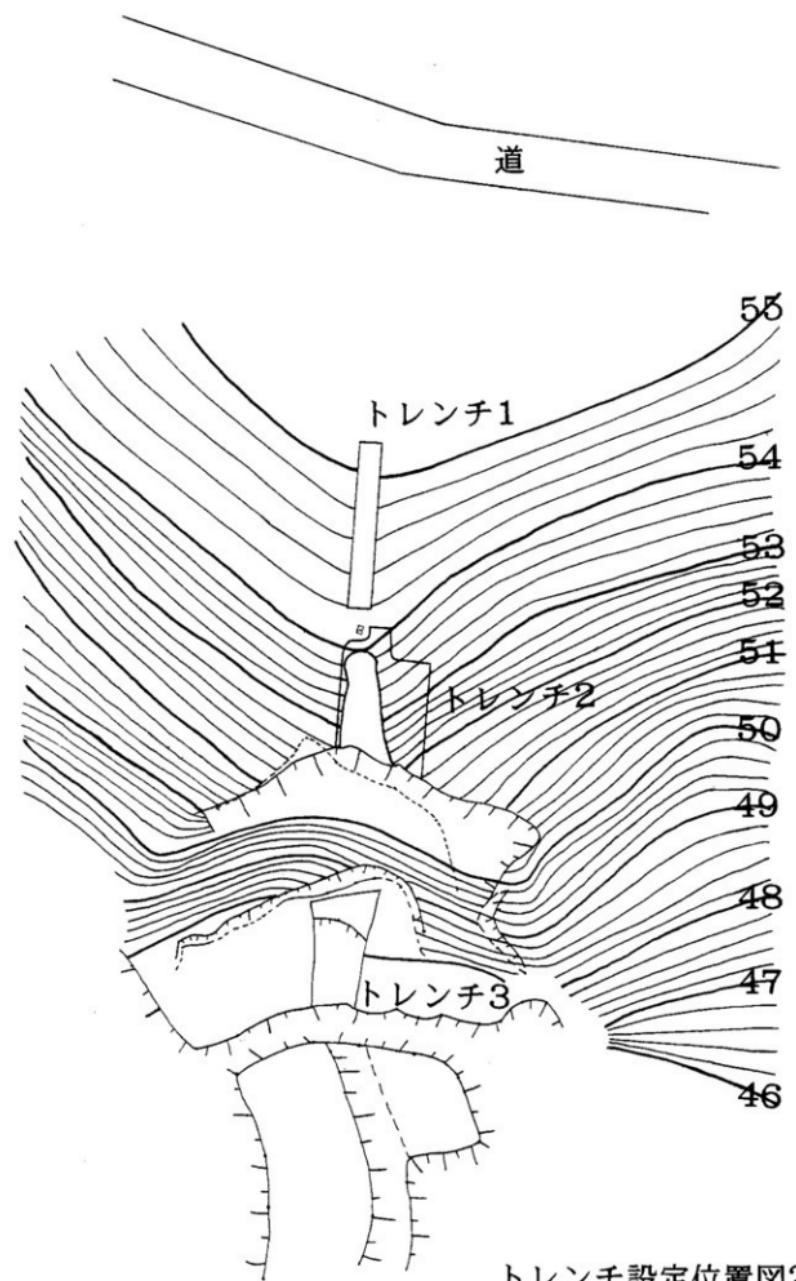
器種	遺物番号	出土地区	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏G身	1	床面直上	口径10.0 器高 3.2	小型の坏で平底。底部から体部にかけて斜め上方に直線的に伸び、口縁部を直立気味に立ち上げ、端部で少し外反させる。	底部外面はヘラ切り後、ナデ調整。口縁部外面は回転ナデ調整。	胎土は密・焼成は良好堅緻・色調は灰白色・底部欠損・内外面に焼けた細砂が付着
坏G身	2	床面直上	口径不明 器高不明	底部は平底。底部から体部にかけて丸味をもって伸びる。	底部外面はヘラ切り後、ナデ調整。口縁部外面は回転ナデ調整。	胎土は密・焼成は良好堅緻・色調は黄灰色・口縁部および底部一部欠損
坏G身	3	1区	口径10.1 器高 3.3	底部から体部にかけて丸味をもって伸び、口縁部をやや直立気味に立ち上げ、端部で少し外反させる。	底部外面はヘラ切り後、ナデ調整。底部内面中央に横ナデ調整の痕跡が見られる。口縁部外面は回転ナデ調整。	胎土は密・焼成は良好堅緻・色調は灰白色・底部欠損・内外面に焼けた細砂付着
坏G身	4	1区	口径10.1 器高 3.1	底部から体部にかけて丸味をもって伸び、口縁部をやや直立気味に立ち上げ、端部で少し外反させる。	底部外面はヘラ切り後、ナデ調整。底部内面中央に横ナデ調整の痕跡が見られる。口縁部外面は回転ナデ調整。	胎土は密・焼成は良好堅緻・色調は灰白色・内外面に焼けた細砂付着
坏G身	5	1区	口径11.0 器高 3.4	底部から体部にかけて丸味をもって伸び、口縁部をやや直立気味に立ち上げ、端部で少し外反させる。	底部外面はヘラ切り後、ナデ調整。底部内面中央に横ナデ調整の痕跡が見られる。口縁部外面は回転ナデ調整。	胎土は密・焼成は生焼け・色調は黄灰色
坏G身	6	1区	口径10.0 器高 3.0	底部から体部にかけて丸味をもって伸び、体部からやや斜め上方に開きながら端部に至る。端部での外反度はほとんどない。	底部外面はヘラ切り後、一部ナデ調整。底部内面中央に横ナデ調整の痕跡が見られる。口縁部外面は回転ナデ調整。	胎土は密・焼成は良好・色調は黄灰色・全体に歪んでいる・内外面に焼けた細砂付着
坏G身	7	1区	口径10.4 器高 3.3	底部は中央がやや膨らむ。底部から体部にかけて斜め上方に伸び、口縁部との境界で屈曲させたあと、口縁部でも屈曲させて端部を外反させる。	底部外面はヘラ切り後、未調整。底部内面中央に横ナデ調整の痕跡が見られる。口縁部外面は回転ナデ調整。	胎土は粗で砂粒を多く含む・焼成は良好(口縁部外面から底部外面に自然釉が厚くかかる)・色調は灰黑色・半分欠損・内外面に焼けた細砂付着
坏G身	8	1区	口径10.0 器高不明	体部は斜め上方に直線的に伸び、口縁部をやや直立気味にし、端部で少し外反させる。	口縁部内外面とも回転ナデ調整。	胎土は密・焼成は良好堅緻・色調は黄灰色・やや歪んでいる・底部欠損
坏G身	9	1区	口径不明 器高不明	底部は平底に近い。	底部外面はヘラ切り後、未調整。内面は回転ナデ調整。	胎土は密・焼成は良好堅緻・色調は内面黄灰色・外表面緑灰色・自然釉が外面に厚くかかる・底部の一部残存
坏G身	10	1区	口径9.0 器高3.6	底部から体部にかけて丸味をもち、口縁部にかけてやや外開きの形態をとる。	底部外面全体を回転ヘラ削りし、丁寧な調整である。口縁部内外面は回転ナデ調整。	胎土は密・焼成は良好堅緻・色調は青灰色・内外面に焼けた砂が付着
坏G身	11	1区	口径推定 10.0 器高3.0	体部は斜め上方に直線的に伸び、口縁部をやや直立気味にし、端部で少し外反させる。	口縁部内外面とも回転ナデ調整。底部外面はヘラ切り後、側端部を回転ヘラ削り。	胎土は密・焼成は良好堅緻・色調は灰白色・内面に焼けた細砂が付着・底部欠損
罐	12	1区	口径10.4	口縁部は逆「ハ」の字形に開く。	口縁部内外面とも回転ナデ調整。	胎土・密・焼成 不十分・色調 外面黄灰色・内面灰白色・口縁部のみ残存
坏B身	13	1区	口径推定 18.4 器高不明	口縁部は逆「ハ」の字形に開く。	口縁部外面は回転ナデ調整	胎土・密・焼成 良好堅緻・色調 黄灰色・脛体部に融着・底部欠損
壺	14	1区	口径不明 器高不明		体部外面上半部は回転ナデ調整、下半部は軸ナデと横ナデ調整、体部内面は回転ナデ調整	胎土・密・焼成 良好堅緻・色調 外面灰白色・内面黄灰色・体部のみ残存

出土遺物観察表

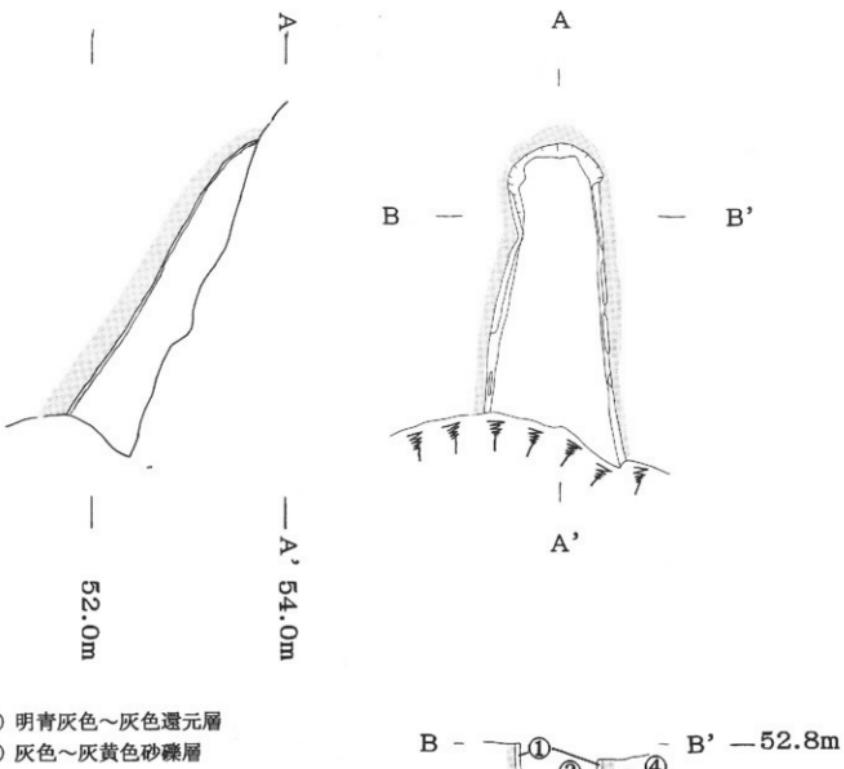
器種	遺物番号	出土地区	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	15	1区		体部外面は平行叩きの後、2条から4条のカキ目痕が横、斜め方向に見られる。内面は円弧叩き	胎土 密・焼成 良好堅緻・色調 青灰色・甕体部破片	
甕	16	1区		体部外面は平行叩きの後、多条の軽いカキ目痕が横方向に見られる。内面は深い円弧叩き	胎土 密・焼成 良好堅緻・色調 青灰色・甕体部破片	
甕	17	1区		体部外面は平行叩きの後、多条のカキ目痕が横、斜め方向に見られる。内面は円弧叩き	胎土 密・焼成 良好堅緻・色調 青灰色・甕体部破片	
甕	18	1区		体部外面は平行叩きの後、外側の半分程度に多条のカキ目痕が横方向に見られる。内面は円弧叩き	胎土 粗(砂粒を多く含む)・焼成 良好堅緻・色調 青灰色・甕体部破片	
甕	19	1区		体部外面は平行叩きの後、横、斜め方向に多条のカキ目痕が見られる。内面は深い円弧叩き	胎土 密・焼成 良好堅緻・色調 黒白色・甕体部破片	



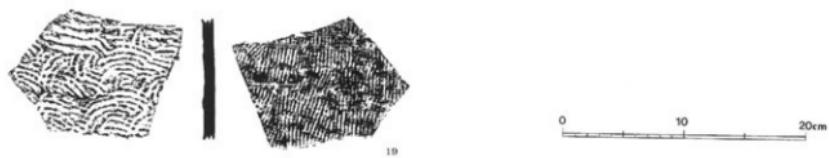
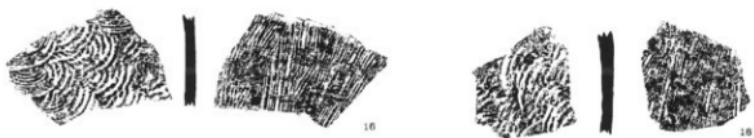
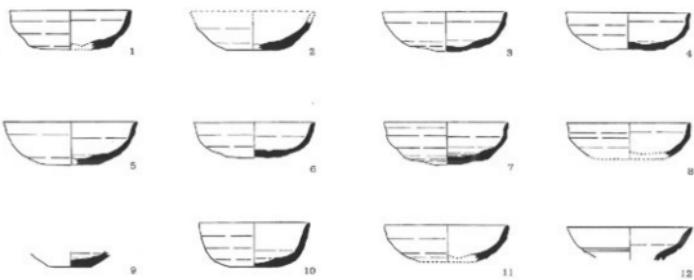
トレンチ設定位置図 1



トレンチ設定位置図2



野新村1号窯 窯体実測図

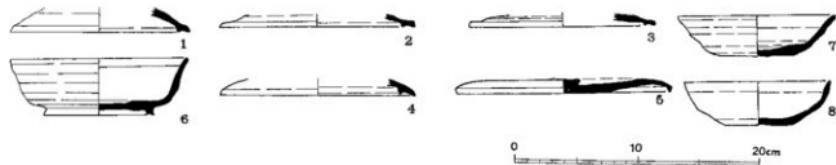


0 10 20cm

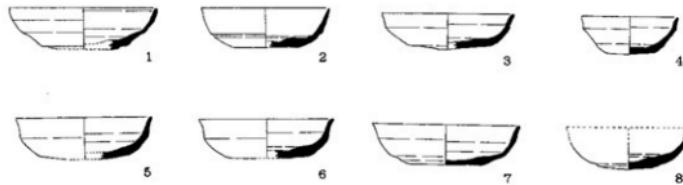
実測図1(野新村1号窯出土土器)



実測図2(溝之口遺跡出土壺G)



実測図3(野新村3号窯出土須恵器)



実測図4(白沢2号窯出土壺G)

総 括

第1節 遺構について

野新村1号窯は草谷川の南に位置し、これに向かって開口する南北方向に延びる丘陵谷部の斜面に立地する。標高は約52mである。1号窯が所在する斜面は、標高51.5m付近から大きく断ち割られており、標高約50m付近まで垂直に深い断崖で、そこから標高約49m付近まですこし湾曲した断崖となっている。断崖頂上部には、窯体断面が明瞭に目視され、その規模は幅約1.3m、深さ約33cm程度である。窯体断面の周囲には、幅約10~15cmの赤色酸化層が全体に広がっている。

窯は丘陵斜面の地山層である黄色～黄橙色砂礫層を掘り込んで構築された半地下式の窯窓である。第2トレーナーにおいて検出された。遺構は窯体の上部を残すのみで、窯体の下部と灰原はすでに破壊されて、消滅していた。残存部の検出長は約3m、最大幅約1.3mで、深さは最大約33cm程度である。先端はすぼまる形となる。窯体の埋土はA-A'断面で、第1層明黄褐色砂質土層、第2層褐色粘質砂層、第3層明黄褐色砂質土層となっていた。窯壁片は各層より出土した。窯壁片にはスサ混じりの粘土が見受けられる。また、架構材の一部も出土した。

窯体は、右（北側）では明青灰色に還元焼成した貼壁が一部残存していた。比較的良く残っている箇所では長さ約70cm、幅約5cm、高さ約20cmの範囲が残っていた。貼壁の一部に粘土を指で撫でつけた痕跡も観察された。左（南側）の壁も部分的な残存であるが、高さは約30cm残る箇所があった。右と同じく明青灰色に還元焼成していた。

床面は地山である砂礫層を素掘りしたもので、全体が残されていた。床面の傾斜角度は部分的にすこし変化するが、約30度である。床面は灰～灰黄色を呈し、周囲には赤色酸化層が全体に10~15cm程度の厚さで広がっていた。また、窯体を断ち割っている断崖の断面観察から窯体周辺に溝を掘った痕跡は見られなかった。

第2節 遺物に関する考察

1. 野新村1号窯の操業時期について

野新村1号窯は灰原のすべてと窯体の一部分を消失していたため、遺物の出土量が33点と少なく、また、壺G身、甕、壺B身、壺、甕の器種を確認したが、いずれも少量であった。このため生産全体の把握は困難であるが、小型化した壺G身を生産していることや壺Hが含まれないことから操業時期について考えてみたい。

西弘海氏は、飛鳥地方出土の須恵器をもとに壺Hについて、「7世紀第3四半期にはその姿が見られなくなる」とされ、また、壺Gは、「7世紀第3四半期にも姿を見ることができ、

7世紀末の藤原京の溝SD105の出土品には、すでにその姿は見られない」とされ、壺Bについても「7世紀第Ⅲ期前半(第3四半期)に出現する」とされる(註1)。これらを飛鳥地方の編年におけるれば、壺Hは飛鳥II形式まで存在し、飛鳥III形式で消滅、また、壺Gは飛鳥IV形式まで存在、飛鳥V形式で消滅するということになる。

一方、播磨地方の須恵器生産でも、壺H・壺Gの消長において飛鳥地方と同様の傾向を示し(註2)、壺Hは飛鳥II形式まで生産され、飛鳥III形式で生産を終えている。また、壺Gは飛鳥I形式から生産を開始し、飛鳥III形式まで生産され、飛鳥IV形式で生産を終える。

これらのことから、野新村1号窯では壺G身を生産していること、壺Hが含まれていなかることから、この窯の操業時期は飛鳥III形式(7世紀第3四半期)に相当するものと思われる(註3)。

2. 野新村1号窯出土の壺Gについて

野新村1号窯出土須恵器の壺Gの口径は10.0cmから11.0cmにおまり、10.0cm程度のものが多い。また、器高は3.1cmから3.6cmまであるが、3.3cm前後のものが多く、全体的には小型のものと言える。

形態については、全体の形から5類(a類・b類・c類・d類・e類)に分類される。

a類には3、4、5が該当し、壺H蓋を逆転させたような形をしている。底部から体部にかけて丸味をもって伸び、口縁部をやや直立気味に立ち上げ、端部で少し外反させる形態である。底部外面はヘラ切り後、ナデ調整を行う。底部内面中央に横ナデ調整の痕跡が認められる。口径は10.1cmから11.0cm、器高は3.1cmから3.4cmである。b類は7が該当し、a類とほぼ同形態であるが、底部から口縁部に至るまでに屈曲回数が多い。底部から体部にかけて斜め上方に伸び、体部で屈曲させたあと、口縁部でも屈曲させ端部を少し外反させる形態である。体部にみられるこの屈曲はナデ痕が強く残った結果の可能性もある。胎土に砂粒を多く含み、粗い作りである。底部外面はヘラ切り後、一部ナデ調整が行われ、底部内面中央に横ナデ調整の痕跡が認められる。口径は10.4cm、器高3.3cmである。c類は1、8、11が該当し、2、9も該当する可能性がある。底部は平坦で、体部は斜め上方に直線的に伸び、口縁部を直立気味に立ち上げ、口縁端部を少し外反させる。底部外面はヘラ切り後、ナデ調整を行いうものと未調整のままのもの、底部外面の側端部を回転ヘラ削りするもの(11)がある。口径10.0cm、器高3.0cmから3.2cmと小型である。d類として10が該当し、台付鉢との関連が指摘されている壺Gである。底部から口縁部にかけてやや外開きのまま直立気味に伸び口縁端部に至る。底部を回転ヘラ削りするなど、丁寧な調整を行っている。口径9.0cm、器高は3.6cmであり、口径に比べ器高は高い。e類は、6が該当し、底部から体部にかけて丸味をもって伸び、口縁部は外反させず斜め上方に開く。底部外面はヘラ切り後、一部ナデ調整を行う。底部内面中央に横ナデ調整の痕跡が認められる。口径10.0cm、器高3.0cmと小型である。

発掘調査では、壺Gの蓋に相当するものが確認できなかったため、蓋を伴わない壺Gと

して生産された可能性がある。坏 G 身には内外面に焼けた細砂の付着したものが多く、融着防止のための細砂と思われ、重ね焼きを行ったようである。また、底部内面中央に横ナデ調整の痕跡が見られるものが多い。

3. 消費地との関係

溝之口遺跡は、加古川下流左岸の加古川市加古川町溝之口に所在する集落遺跡である（註3）。野新村1号窯からは西方に7.5kmに位置し、旧加古郡の西端に位置する。

西調査区の溝1などから野新村1号窯と同形態の坏 G(1~3)が出土している（実測図2）。溝之口遺跡出土の坏 G 身のうち、1は、野新村1号窯で分類した b 類、2が c 類に相当し、3は蓋の可能性もあるが、一応、d 類に分類した。1は、底部から口縁部に至るまで屈曲回数が多く、b 類としたものである。口径 11.0cm、器高 3.6cm、口縁部内外面は回転ナデ調整、底部外面はヘラ切り後、未調整、底部内面中央に横ナデ調整を行う。なお、内外面に焼けた細砂が付着している。野新村1号窯出土のものとの共通点を探してみると、①底部内面中央を横ナデ調整すること、②焼けた細砂が付着していること、③溝之口遺跡出土のものは、底部外面をヘラ切り後、一部ナデ調整するのに対し、野新村1号窯は未調整のままであるが、a 類と b 類の区別は屈曲の回数の違いによるものだけであることから、ほぼ同形態といえ、野新村1号窯の a 類には底部外面の調整がヘラ切り後、ナデ調整するものがあること、口径はやや異なるが器高はほぼ同じである（野新村1号窯は口径 10.4cm、器高 3.3cm）ことから野新村1号窯から供給された可能性が高いと思われる。2は、c 類に分類でき、口径 10.6cm、器高 3.7cm、底部外面はヘラ切り後、未調整、底部内面は回転ナデ調整を行う。野新村1号窯では c 類を多く生産しており（図 7-1・2・8・9・11）、底部外面はヘラ切り後、未調整のものがあり（9）、底部内面は回転ナデ調整を行う。大きさは野新村1号窯出土のもの（口径 10.0cm、器高 3.2cm）の方がやや小さいが、共通点もあることから、野新村1号窯との関係は考えられると思われる。d 類の 3 は、口径 10.0cm、器高 3.6cm、口縁部内外面は回転ナデ調整、底部外面は回転ヘラ削りを施し、底部内面は回転ナデ調整を行う。野新村1号窯ではこの形態の坏 G は未確認である。

4. 周辺窯との関係

野新村古窯跡群は「加古川市遺跡分布地図」（註4）によれば 3 基から成る古窯跡群であり、いずれも丘陵の東斜面に位置し、南から北に向かって 1 号窯、2 号窯、3 号窯と名付けられている。

2 号窯の詳細は不明であるが、3 号窯の灰原から坏 B 蓋（1~5）、坏 B 身（註5）（6）、坏 A（7・8）が採集されている。（実測図3）

1 は、坏 B 蓋で、真野脩氏の報告書（註5）に記載されたものである。口径 16.0cm、短いかえりをもち、口縁部下端より 0.0cm 突出する。2 は、坏 B 蓋である。口径 16.0cm、短いかえりをもち、口縁部下端より 0.0cm 突出する。口縁部内外面とも回転ナデ調整を行う。

3は、壺B蓋である。口径15.0cm、短いかえりをもち、口縁部下端より-0.1cm突出する。口縁部の内外面とも回転ナデ調整を行う。4は、壺B蓋である。口径17.6cm、短いかえりをもち、口縁部下端より-0.1cm突出する。口縁部の内外面とも回転ナデ調整を行う。5は、壺B蓋である。口径17.6cm、器高2.1cmでかえりをもたず、つまみは扁平で中央がやや尖る。天井部は回転ヘラ削りを行い、内面は不整方向の横ナデ調整を行う。6は、壺B身であり、野新村氏の報告書(註5)に記載されたものである。7は、壺Aで、口径13.0cm、器高3.2cm、底部外面はヘラ切り後、未調整。内面は回転ナデ調整を行う。8は、壺Aで、口径12.0cm、器高3.5cm、底部外面はヘラ切り後、ナデ調整。内面は回転ナデ調整を行う。これら7、8の壺Aは、野新村1号窯の壺G類の流れをくむものと思われる。

野新村2号窯では壺B蓋にかえりのあるものとないものとが共存しており、壺Aが出現していることから1号窯より後出の段階(飛鳥IV形式)の操業時期であると思われる。

以上のことから、野新村古窯跡群では、2号窯が1号窯の北に隣接していることから、1号窯→(2号窯)→3号窯の順に操業した可能性が高いと思われる。

なお、貞野脩氏の報告書(註5)に野新村古窯跡群からの採集遺物として、壺Hの蓋と身の図が記載されていることから当古窯跡群の周辺に壺Hを生産した窯が存在する可能性があり、西北550mに所在する野村古窯跡群(加古川市八幡町下村)の窯場移動の結果、成立した古窯跡群と思われる。

5. 加古川市内での同時期操業の窯跡について

(1) 白沢2号窯出土の壺G身

野新村1号窯と同時期操業の窯は加古川右岸の旧印南郡白沢2号窯がある。森内秀造氏(註6)や永井信弘氏(註7)、上月昭信(註2)の報告があるが、ここでは加古川市教育委員会が保管している壺Gの資料で野新村1号窯と比較してみたい。

白沢2号窯およびその周辺から採集された須恵器には壺H、壺G、壺B、壺Aなどがあり、長期間操業されたことが知られる。このうち、壺G身には次のものがある。(実測図4)

1は、口径12.0cm、器高3.1cm、底部外面はヘラ切り後、未調整のままである。2は、口径10.6cm、器高3.2cm、底部外面はヘラ切り後、粗いナデ調整を行う。体部と口縁部の境界に深い沈線が一条めぐる。3は、口径11.0cm、器高推定3.0cm、底部はヘラ切り後、未調整のままである。4は、口径9.0cmと小さく、器高は3.1cm、口縁部外面はヘラ切り後、粗いナデ調整を行う。5は、推定口径11.0cm、器高3.4cm、口縁部の内外面は回転ナデ調整を行うが、底部内外面は自然釉が付着しているため調整方法は不明である。6は、5に類似し、口径11.0cm、器高3.2cm、底部外面はヘラ切り後、ナデ調整を行う。7は、口径12.0cm、器高3.3cm、底部外面はヘラ切り後、未調整のままでする。底部内面に不整方向の横ナデ調整が見られる。8は、口縁部を失っており、口径、器高とも不明であるが、底部外面はヘラ切り後、側端部を未調整のまま残しているため段となる。底部内面は回転ナデ調整を行う。

白沢 2 号窯の壺 G 身は大半が a 類に分類され、1 点 c 類のものも混じるが、体部と口縁部で屈曲させるものが多くなっており、また、野新村 1 号窯に比べ、口径が大きく、口縁部の外方への傾斜度が大きいことから野新村 1 号窯の壺 G より後出のものではないかと思われた。

なお、観察表の作成にあたり加西市教育委員会の立花聰、永井信弘の両氏にお世話になりました。ここに名前を記し、感謝申し上げます。

註

- (1) 西弘海「土器様式の成立とその背景」1986 年
- (2) 上月昭信「播磨地方における 6 世紀・7 世紀の須恵器生産」2004 年
- (3) 岡本一士ほか「溝之口遺跡発掘調査報告書 I」加古川市教育委員会 1992 年
- (4) 「加古川市遺跡分布地図」加古川市教育委員会 1984 年
- (5) 貞野脩「上西条遺跡」上西条遺跡調査団 1972 年
- (6) 森内秀造・深江英憲「白沢 3・5 号窯」兵庫県教育委員会 1999 年
- (7) 永井信弘「播磨地方における古墳時代須恵器の変遷」『小谷遺跡(第 6 次)』加西市教育委員会 1995 年
- (8) 兵庫県立考古博物館の森内秀造、篠宮正の両氏から、図 1 の底部を欠損している壺 G について、高壺の壺部を穿ち、焼台として使用したことの可能性があること、また図 13 の壺 B についても、壺に融着していることから壺 G など他の器形のものが変形した可能性もあるとの助言を頂いた。

写 真 図 版

写真図版一 調査地近景

4+



0 10 20 30 40 50m



第1トレンチ掘削作業
(西より)



第1トレンチ
(西より)



崖面精査作業

窯体断面検出状況
(東より)



野新村1号窯
窯体検出状況
(南より)



窯体(西より)





窯体(東より)



窯体及び崖面
(東より)



窯体(北より)



窯体(南より)



第3トレンチ
(西より)



第4トレンチ
(東より)



1



3



4



5



6



7



10



2



8



9



11



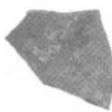
12



13



14



15



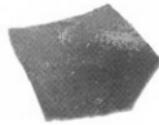
16



17



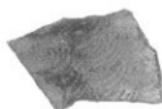
18



19



15



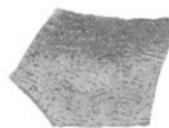
16



17



18



19

加古川市文化財調査報告 2 3

野新村 1 号窯発掘調査報告書

編集・発行 加古川市教育委員会 文化財調査研究センター

住所・TEL 加古川市平岡町新在家 1224-7 Tel079-423-4088

印刷 稲垣印刷

住所・TEL 加古川市野口町古大内 349-28 Tel079-426-6653

発行年月日 平成 22 年 2 月 26 日
